



環境活動

自然環境

(自然破壊への対応)



都市の自然環境の保全・再生に努めます 環境配慮方針 1-①

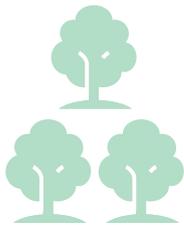
取組方針

緑と水の豊かな自然環境は、人々にうるおいを与える動植物とのふれあいの場、未来を担う子どもたちの教育の場として大事なものです。また、防災・避難機能や地球温暖化防止機能など多くの機能も兼ね備えています。このような多様な機能を有する自然環境と調和したまちづくりを進めます。

実績

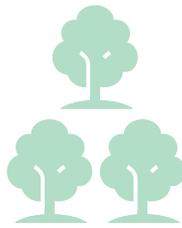
植樹本数 (高中木)

約**20,000**本



既存樹木の有効活用
(高中木の保存・移植)

約**600**本



透水性舗装

約**55,200**m²



自己評価

樹木を新たに植えるだけでなく、もともとあった樹木についても数多く残すことで、地元の方々の想いを引き継ぐことができました。

また、透水性舗装を積極的に採用したことは、近年多発する豪雨対策につながると考えています。

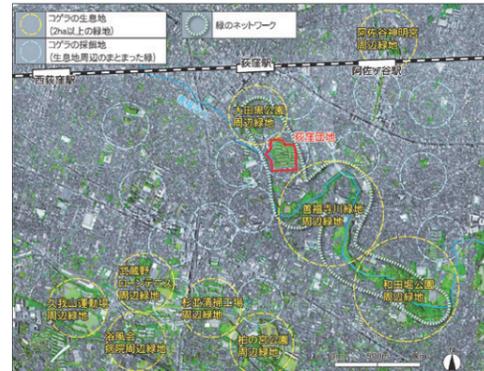
今後も引き続き、地域の自然環境を良くする活動を推進していきます。

第1回
グリーンインフラ大賞
生態系保全部門優秀賞受賞
シャレール荻窪に
(東京都杉並区)
おける環境共生

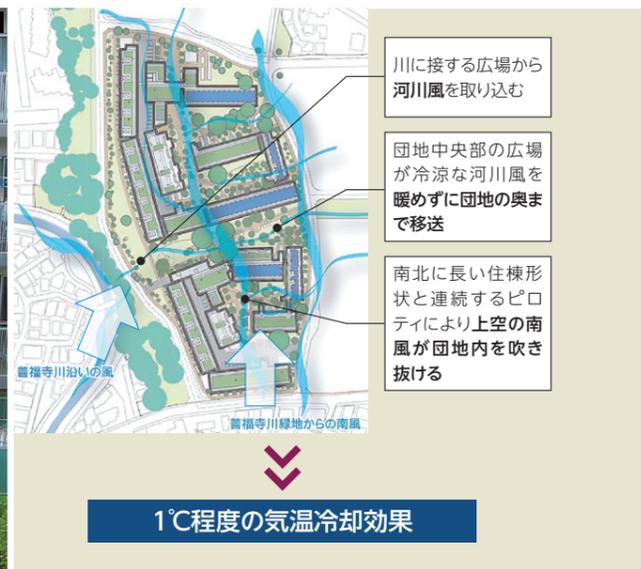
緩和策 対応策

ひとと自然が共生するまちづくりに向けた⑤つの取組

- ① 緑のネットワーク形成** 豊かな緑に囲まれたまち
団地で育った樹木を保存や移植により残し、周辺の緑の拠点と共に豊かなまちをつくります。
- ② 生物多様性の継承** 生きものが集まるまち
雨水を利用したバードバスづくりや、まとまった緑地の保存など、生物多様性に貢献する屋外環境をつくります。
- ③ 風の通り道の確保** 風が通り抜けるまち
夏に善福寺川の上空を吹く涼風を団地内に通す住棟配置とし、住戸内にも風を取り込む工夫をします。
- ④ ヒートアイランド現象の緩和** 涼しいまち
ホットスポットとなる平面駐車場を少なくし、屋上・壁面緑化や打ち水効果のある保水性舗装を行い、夏の暑さを軽減させます。
- ⑤ 環境にやさしいライフスタイルの支援** 地球にやさしく、人がふれあえるまち
交流が生まれるクラインガルテン(貸し農園)、伐採された樹木の活用など団地にお住まいの皆様が自然と親しみ暮らせる支援をします。



1 118本の樹木保存や大径木の移植等を実施し、豊かな緑を継承。 2 団地に採餌にくるコゲラを指標とした、周辺生物環境とのネットワーク概念図を踏まえて、まとまった緑地の保全、蝶のための柑橘系樹木を保存し、周辺に生息する多くの生き物が自然にふれあえる団地屋外空間を創出。 3 夏季は南風や善福寺川の涼風が取り込まれ、隅々まで風がいきわたるような住棟配置。これにより、周辺の外気温より1℃程度の気温冷却効果(熱環境改善)を確認。冬季の北風は常緑樹を配置することで遮蔽。 4 つる性植物による壁面緑化、既存樹木を活かした中庭、打ち水効果のある保水性舗装等により、ヒートアイランド現象を緩和。 5 左:クラインガルテン(貸し農園) 右:生きもの観察会の様子



ENVIRONMENT 環境活動

自然環境(自然破壊への対応)

都市の自然環境の保全・再生に向けた取組



良好な都市景観の形成

グリーンインフラを活用した計画・設計

環境負荷の低減や居心地の良い空間形成を図るため、周辺とのネットワークの形成を意識した広域的な視点で、グリーンインフラ(社会資本整備や土地利用等のハード・ソフト両面において、自然環境が有する多様な機能を活用し、持続可能で魅力ある国土・都市・地域づくりを進める取組)を活用した計画・設計を進めています。

対応策 NEW

CASE STUDY グリーンインフラに関する情報発信

2020年9月、UR都市機構公式ホームページ内に「グリーンインフラ」のページを新規開設し、UR都市機構が取り組むグリーンインフラや関連する技術についてわかりやすく整理して情報発信を開始しました。過年度の取組についてまとめた事例集も掲載しています。

また、UR都市機構公式Twitterを活用した定期的な情報発信も開始しました。最新の事例や過年度完了事業の現在の様子などをグリーンインフラの視点で見直して、その魅力を伝えています。

今後もグリーンインフラを活用したまち・住まいづくりを推進しながら、その様子を皆さまにわかりやすくお伝えしていきます。



<https://www.ur-net.go.jp/aboutus/action/greeninfra/index.html>

透水性舗装、雨水浸透工法

対応策

UR賃貸住宅では、通路や駐車場などの舗装に浸透性の高い透水性舗装を採用しています。路面の排水効果が高く、水たまりができてくいたため、歩行性等の向上が図れるほか、浸透トレッチや浸透柵などの雨水浸透施設と組み合わせることで、降った雨水を極力地下へ浸透させ、下水道や河川への集中的な流入を抑えることができます。また地下水のかん養を通して地域の水循環が確保され、生態系の維持につながるなど総合的に環境負荷を低減しています。

保水性舗装によるヒートアイランド対策

対応策

保水性舗装は、舗装材が一時的に雨水を蓄え、その雨水が蒸発する際の熱吸収効果によって路面温度の上昇を抑制する機能があります。この機能により、日中の路面温度の上昇抑制や路床部分の蓄熱量低減による夜間の放熱抑制により、ヒートアイランド現象を緩和することが期待されます。

都市再生における公園整備

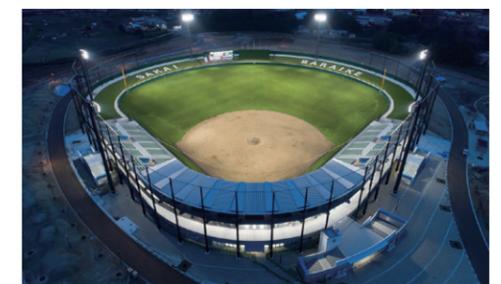
都市再生の推進にあたっては、民間事業者等と連携し、自然環境の保全や既存樹木の活用など環境に配慮したまちづくりを行っています。

都市公園は緑と身近にふれあえる憩いの場として、良好な都市環境を形成する重要な都市施設です。UR都市機構は、地方公共団体からの要請に基づき、都市公園を整備しています。2020年度は7カ所で整備を実施しました。

CASE STUDY 公園と調和した本格的な野球場整備

2020年4月1日、原池公園(大阪府堺市、約17.5haの運動公園)内に、公園と調和した本格的な野球場がオープンしました。周辺環境に配慮し、建物全体のボリュームと高さを抑えコンコースを外部に開放するとともに、チケット売場前の広場にはバットに使用されるアオダモを、野球場敷地周囲にはソメイヨシノをそれぞれ配植するなど、彩りや緑陰に囲まれた野球場となっています。

本野球場は、高校野球夏季予選大会からNPB2軍公式戦まで開催することが可能となっており、野球熱が高く、市民に親しまれてきた堺の野球の歴史・文化を次世代に引き継ぐとともに、市民が質の高い環境で野球に取り組むことができるよう、市民の交流、競技の強化・育成の拠点施設として期待されています。



野球場全景

オープンスペースにおける緑の確保

UR賃貸住宅や都市再生事業におけるオープンスペースでは、多くの緑地を創出・再生しています。2020年度は、新たに高木を約20,000本植えました。

CASE STUDY 都心部再開発事業におけるオープンスペースでのグリーンインフラ活用

緩和策

適応策

2020年7月22日、コモレ四谷(東京都新宿区)の敷地内にグリーンインフラを活用した「コモレビの広場」が完成しました。地形を丘形状としたコモレビの広場は、武蔵野の雑木林のイメージと都心に彩りを添える草花のある空間です。外濠や迎賓館、新宿御苑などの緑地に近接した敷地で変化に富んだ地形、多様な植栽等の環境を創造することにより、鳥やトンボが飛来する豊かな空間が形成されています。また、子どもたちに自然環境に興味を持ってもらい、大切にすることを育んでもらうよう、「みどりのサイン」には生きものの写真や話を掲載しています。

コモレ四谷では、敷地全体に基準の1.5倍以上という大規模な緑化空間が整備され、都心の高層タワーでありながら緑に包まれた空間が形成されているとともに、屋上や壁面の緑化も緑量感だけでなく、四季の移ろいが感じられるように多くの落葉樹、花木、草花が配置されています。また、雨水浸透トレンチ



コモレビの広場全景



広場は散策路で通り抜けできます

等との相乗効果により、より一層の雨水流出抑制やヒートアイランド現象の緩和などの多様な機能の発揮も見込まれると期待されています。

これら以外にも地域の歴史や都市環境改善に配慮した取組は、今後の再開発におけるグリーンインフラ活用の先導的な事例として更なる展開が期待されます。



広場に設置された「みどりのサイン」盤面が足元に投影される仕掛けも

屋上緑化による緑の創出

屋上緑化は身近な緑の空間を提供し、都市部のヒートアイランド現象を緩和するものです。UR都市機構では1993年度から薄層土壌による屋上緑化の技術開発を行い、UR賃貸住宅等への屋上緑化を実施し、これまでに約16.4ha(東京ドーム約3.5個分)整備してきました。

にぎわい等による地域の価値向上、都市への愛着や誇りの醸成

まちづくりにおいては、にぎわいの形成を図る等地域の価値向上や、UR賃貸住宅居住者の地域に対する愛着や誇りを醸成させるために、地域の自然、生活、歴史、文化等の特性や、樹木等の環境資源を積極的に活用しています。

CASE STUDY 環境資源の活用(町の木を「みらいの森」に植樹)

緩和策

2020年12月13日、UR都市機構が町より受託し整備した南三陸町震災復興記念公園(宮城県南三陸町)において、町主催による植樹式が開催され、町の木であるタブノキやヤマモミジなど70本が復興への願いを込めて植えられました。この森の成長していく姿は、自然の回復力と復興に向かって進み続ける人々を表し、人の営みと自然が調和するまちの未来を象徴しています。

植樹式は、公園内の「みらいの森」エリアで行われ、雪の舞う中、



植樹の様子



みらいの森

町内の小学生や保護者等が力を合わせて植樹を行い、これらの木々の成長を楽しみにしていました。

既存樹木の有効活用(グリーン・バンク・システム)

UR賃貸住宅の建替の際などに、既存樹木の有効活用(グリーン・バンク・システム)を積極的に行っています。長い年月をかけて育ってきたUR賃貸住宅用地内の貴重な緑を活用するグリーン・バンク・システムは、既存樹木を極力そのまま保存する、移植して同じ地区内で活用する、他の地区に移植して活用するなどさまざまな事業において有効活用を進めています。伐採せざるを得ない樹木についても木材をベンチ用材などに加工して再生利用を行っています。

2020年度は、浜見平団地(神奈川県茅ヶ崎市)等での建替において既存樹木を活用した整備を行いました。また、保存樹木を活用することを条件とした土地譲渡や、移管公園などの整備における保存または移植樹木の活用など、引き渡し先の民間事業者や地方公共団体との連携による既存樹木の有効活用も進めています。

CASE STUDY 地域の自然資産としての桜の移植

緩和策

適応策

2020年4月1日に開園した大堀川防災レクリエーション公園(篠籠田)(千葉県柏市)では、市民から保存の要望が多かったこともあり、地域に親しまれてきた桜の移植を行いました。桜を保存したことにより、当公園は周辺の大堀川の桜並木とよりつながりが増した空間となり、地域の資産を活かした公園づくりが実現しました。

災害時には広域避難場所(約1万人収容)として利用ができるように、非常用発電機や耐震性井戸付き貯水槽、かまどベンチ、マンホールトイレ、防火樹林などの防災機能を備えています。公園内の管理事務所は、旧柏市立かきわ幼稚園舎をリノベーションしたものです。幼稚園は、1978年に開園し、2013年3

月に閉園するまで約2,500人が卒園しました。公園整備にあたり、その卒園生や関係者から園舎を残してほしいとの声が寄せられたため、防災に役立つ施設としての再利用を図りました。屋根防水の改修など躯体の耐久性を高めるとともに、園舎の建物デザインを活かした補修工事を行い、防災備蓄倉庫の機能を有する管理事務所としてリノベーションしました。



春の公園



園内の桜



旧幼稚園舎

生きものとふれあえるビオトープの創出

自然環境が少ない都市において、ビオトープ(生きものの生息空間)を計画的に整備することで、地域生態系の保全・再生を図っています。UR賃貸住宅では、これまで既存林の活用や水辺の整備などさまざまなタイプのビオトープを創出してきました。

2005年度から2019年度まで、供用開始から一定の年数が経過したビオトープを対象に植物や昆虫、鳥類などの生育・生息状況について調査を行っており、多摩平の森(東京都多摩市)においては東京都レッドリストに記載の重要種であるアオゲラ(比較的大きな緑地に生息する鳥類)が新たに飛来していることが確認されるなど、ビオトープが地域生態系ネットワークのつながりを高める場として機能していると考えられます。

今後も、より地域生態系の保全・再生に貢献するオープンスペースの創出・維持を図っていきます。

■UR都市機構における生物多様性への配慮 <https://www.ur-net.go.jp/aboutus/action/kankyo/shoukai/seibutsu.html>



CASE STUDY 身近な生きものとふれあえる環境づくり(生きものに配慮した植物管理)

NEW

植物管理において、これまで一律に刈り込んでいた草刈高さを段階的に変えるなど、より生きものに配慮した管理手法の試行実施を2020年度から開始し、9団地で行いました。今後も定期的にモニタリング調査を実施し、試行実施における効果測定を行いながら、生きものが生息しやすい環境づくりにつながるよう、管理手法の改善を行っていく予定です。

生物多様性を高める管理の施行実施状況(アーベインビオ川崎(神奈川県川崎市))

